

十四、心の垢

重苦しい人生の旅を続けておれば、いつしかに疲れて、歩む足が重くなる。体の疲れは、静かに眠ることによつて癒すことができるが、心の疲れは、眠っただけでは治らない。

心の疲れ、心の垢、それが増すと、生きることが面白くなくなり、愚痴や、自暴自棄や、癩癩がおこり、ますます生きることが苦しくなる。であるがゆえに、心の疲れや、心の垢は不断に取り去られねばならない。どうすればいいか。

『大無量寿経』には、

「法門を開闡し、垢汚を洗濯し、清白を顕明す。」とあり、また

「其れ衆生ありて、斯の光に遇ふ者は、三垢消滅し、身意柔軟に、歡喜踊躍して善心生ず。」と説かれてあり、和讃には、

「道光明朗超絶せり 清浄光仏とまをすなり

ひとたび光照かふるもの 業苦をのぞき解脱をう。」と讃嘆されてある。

斯の光とは、如来の智慧光のことである。み仏の光に遇うものは、三垢が消滅する。三垢とは、貪欲、瞋恚、愚痴のことである。

瞋恚の炎は、心の垢である。垢であるばかりか、激しい毒である。心を切り刻む、兇刃毒剣である。心臓をえぐるような激痛である。ただに心を害するのみならず、体をも削る。怒る心が続けば世の中は味気ないものになり、狭苦しい住みにくい火宅となる。怒る心は貪欲が根底である。貪欲の深い者は必ず怒りやすい。愚痴はさらにその根底である。心の垢とは、この三毒の煩惱のことである。

「斯の光に遇ふ者は、身意柔軟に、歡喜踊躍して善心生ず。」

ありがたい御文である。静かにみ仏の光に遇えば、身も意も、柔軟にしていただけ、歡喜の心が訪れて、善い心がおこる。念仏の人は、しみじみとこの世界を味わわせていただくことである。

垢づいた心は、柔軟でない。硬直である。硬い心である。いかに正しそうに見えても、柔軟でない心は人の世を傷つける。柔道は力の人を作るのもあるが、真には、身も心も柔らかになつて、傷つかないようにする道ではないのか。仏の道は、心の柔道である。

世界は、晩春から初夏へとたどりつつある。木々の若葉の、何と若々しく柔らかであることよ。その幹は堅くても、若葉や芽は柔らかである。そしてそこには力がおどつている。

「身意柔軟に、歡喜踊躍して善心生ず。」とは、若葉におどる力のように、若々しくやわらかにのびのびした相である。

「明朗」という言葉は、現代の流行語の一つである。「現代的明朗さ」などという。着物の色や、髪の毛のあげ方や、歩きぶりや、簡単なものの考え方や、こだわりがないことや等々、沢山あるだろうが、ほんとうに、そうしたことがはたして真の明朗であるうか。

「道光明朗超絶せり 清浄光仏とまをすなり

ひとたび光照かふるもの 業垢をのぞき解説をう」

真の明朗は、道光のみである。道の光の輝くところのみ明るく朗らかである。道光の失われるところ、すぐそこには嫌な暗黒が訪れている。真に明朗な一日を送りたければ、道を念じ、道を生きることである。清浄光仏とは、南無阿弥陀仏のことである。衆生の貪欲の汚さを超えた清浄光そのものにてまします。お念仏の中に、この光照をかぶるものは、業の垢を除き解脱を得さしていただくのである。

「法門を開闡し、垢汚を洗濯し、清白を顕明す。」

この文のすぐ前には帰依という文字がある。衆生は法門の前に帰依すべきである。仏、菩薩は帰依する衆生のために、広大なる法門を開き、法によって垢汚を洗濯して、清白にしてくださいるのである。法に帰依することは、心の垢汚を除いて清白にする必須の条件なのである。

道理の前に素直に頭を下げることは尊いことである。

「道理はそうだろうが、道理のとおりにはならぬ。」

と言つて道理でないことを通そうとする心が、我慢である。我慢を、突張っていたのでは、救われることはできない。

念仏を申し、仏を信じたはずの人が、世間にあつては、道理であつても、けつして素直に頭を下げない。それが今頃の多くの念仏信者ではあるまいか。

道理の前に素直に頭を下げることはむつかしくて、我慢や勝手を通すことは楽なようである。それは大変なまちがひである。

道理の前に素直に頭を下げる生活こそ、易行道そのものである。

道理の前に我慢強く頭を下げない生活は、必ず狭苦しく、垢汚の満ち満ちた生活となる。素直に道理とわかれば頭を下げて受け取ることである。

湯に入ると体の気持がよくなる。垢や脂や汚れがなくなるからである。

しかしまたすぐの間に汚くなつてくる。衣服でも家でもその他何でも、一度洗つてきれいにしておけば、いつまでも、きれいなままでいるものは一つとしてあり得ない。不断に洗つてのみ清らかであり得る。これが人間の世界のさだめである。

心の世界でもまたそのとおりである。十年前の信心が今日の心を洗つてはくれない。今日の心は、今日のみ法に、今日の仏に洗われるのである。であるから今日一日法をぬきに念仏ぬきに、我慢にのみものを言わせれば、今日一日垢づいたまま生きねばならない。

心に垢がついて、いよいよ汚くなると「仏法などがあるものか、信心などばかりかきい」という気になる。そしてますます正法を遠ざかる。正法を遠ざかれば遠ざかるほど、心の垢が増してくる。ついに底なき迷いに沈む。

蓮如上人は御文章(二の一)に、「多屋内方もその外の人も大略信心を決定したまへるよし聞えたり、めでたく本望これに過ぐべからず。さりながら、そのまま打捨て候へば信心も失せ候べし。『細々に信心の溝を深へて弥陀の法水を流せ』といへる事ありげに候。」と仰せられた。

一度信心を頂いておけば、一生涯光り通しの、珠のようなものだと思つたら大変である。信心はけつしてそんな機械的なものではない。徹頭徹尾、人間自覚の問題である。ほつておいても光るようなものではなくして、むしろ垢づいたと知り、そのままにほつておけないで、あくまで清浄真実なるものを求めて歩まなくてはおれない心である。垢を垢と知る心である。だから正しい念仏の人は必ず一生求道する。

何ものにもけつして垢づかない永遠の清浄真実は、聖なる如来法身のみである。如来は永遠の赤き光炎である。一切衆生の三毒煩惱の薪を焼きつくす聖火である。ただこの聖火のみよく一切の穢悪を転じて、徳とし善となしたものである。ゆえにただ念仏すべきである。生きてゆくに足の重き日、ただこの聖なる法身の光に浄化されて信心歓喜に帰るべきである。